

神輿をかつごう  
故郷をかつごう

さくらみ川



# 神輿かつぎ手大募集!

あつひたかひこじんじゃ

みこしとぎよ

熱日高彦神社春祭の神輿渡御は、神様が区内を巡り、この年の幸福と豊かな実りを与えて下さる大切な神事です。私たちのご先祖さまが、江戸時代以前の昔からつたえてきた島田地区の誇るべき文化財です。

神輿かつぎの達成感は最高です! 1年分くらい元気になります。そのうえ家族も友だちも地域も元気にしてしまう不思議なパワーがあります。

**1年に1度! ぜひあなたも参加してみませんか。**

**力を合わせ、いっしょに神輿をかつぎましょう!**

日時 平成16年4月6日(火) 祭典午前8時 神輿渡御9時半~

詳しい問い合わせ・申し込みは、各区神社総代・神輿世話人まで

第四九号 平戸

熱日高彦神社社務所

電話 〇二二四

atuhitaka

漁故 知新

# 神迎えの季節

## 神輿渡御に寄せて

日本にはなぜいばい神様が居るの？

あつという間に過ぎてしまったお正月。今や三月・四月で春本番。新しい年度も始まります。日本は正月も春の季節もいよいよ、来る夏も待ち遠しい。山紫水明という言葉どおり、居なりで折々に目を楽しませ、衣食住を与えてくれます。

私達はこのように四季の変化の豊かな国に暮らしています。私達を豊に育んでくれる大自然の動き、その恵みに「神」を感じ、遠い昔から人々が感謝しつつ暮らして来ました。その恵みの分だけ「神」の数はおのずから多くなります。日本古来の「多神教」は、このような恵まれた、しかも変化の豊かな大自然と大きく関わっています。  
**春は神さまが来臨する**

神様の数が多いだけでなく、神様が移動される。先ずお正月様をお迎えます。七草で、寄り来る邪気(邪神の訪れ)を被います。十一日は「農のはだち」で、田の神を床の間から田にお遷します。十四日、八レ(神聖)のときから神さまを一応お納めし、十五日からは普段に戻り始めます。いよいよ自然が動き始める四月頃になって方々で春祭があります。このお祭は当然農業とかかわりがあります。作物(稲)や生業の神さまを迎えるのです。その迎え方はいろいろです。

例えば神輿に乗って家々をめぐる方法です。縄文の昔から稲作が行われていたことが分かっています。きましたが、「種を蒔けば作物が育つ。」ということが分かっているから出来たこと。それが分かっている、その種がよく育つてくれるようにと、改めて稲の霊魂をお迎えしてきたのです。稲を作っていない家でも、生命の元として共通に祝ってきました。もちろん神輿は稲魂だけでなく、家々の精気に関する、一年の幸せを戴くことでもあります。

もう一つは、花や植物に託してお迎える方法です。子眉嶺神社(蚕養嶺神社)の八十八夜祭に山登りし、山の椿や山吹の花枝を手折ってきて水口に刺すやり方。正月の松迎えやミズキ(団子の木)採り、盆の花迎えと共通する方法です。

もちろんお札や、水や土を戴くこともありますが、神様が山から里へと移動されるのが春祭。このように女の人が花を戴いたり、男の人が神輿を担いだりして神様の来臨を表現して来たのです。  
**神様の迎え方 子供神輿も神さま**

では、どうお迎えすればよいのでしょうか。目には見えない神様ですから、お迎えする方も



それを目に見えない形で表現します。若い人たちの世帯では迷うこともあると思いますが、「神を祀(まつ)るに神居ますが如く」するとされています。「居ますが如く」とは、「尊いお方がそこに御出でになり、そのお方に仕える形で」言葉も態度もお供えものも、それに応じた配慮をするということです。形だけでなく中身(心)の問題です。

家庭でも、子供に頼りにされる父親を作るには、その妻(母親)等が、立派な父親に接する形で平日頃生活しないと、子供が迷ったときに取り返しが効かなくなってしまう可能性があります。学校の先生やおまわりさんだつて同じことが言えます。

まして目に見えない神様であれば、例えば神輿なら、お迎える方も、お供する神職・総代も、子供会の役員もいっそう気をつけたいですね。

ちなみに、子ども会の依神輿も所詮神さま、お供えは神様に上げるもの、その後で神さまから子ども会に戴くものです。尊い神様の前に急いで手を出すことは失礼になりますよ。

お迎えする神さまを私達の態度で立派にすること、子供会を含めて氏子・崇敬者全体がよい一年を送れるようにしたいですね。



**赤いお旗に  
ねがいごと**

**子眉嶺神社のぼり旗奉納のご案内**

既報、蚕養嶺神社を改め「子眉嶺神社」または「子眉嶺稲荷神社」とお呼びすることになったことをお伝えしました。この神社は歴史的、民俗信仰的に当地の農業、衣食住の生活にとって大変重要な意味を持っております。

皆様の参拝を誘うために、現在地である忠魂碑の丘の整備に手を就けたまま、つい滞っておりますが、いよいよ具体化する段階にきております。夏を迎える八十八夜には、見晴らしのよい丘でくつろいで頂ける様にしたいと思っております。

一方、境内地を飾る小型のぼり旗奉納につきましては、前に予告してありましたが、いよいよ皆様のご協力を頂く時期が参りましたので、よろしくお願いいたします。

**幟旗（のぼりばた）奉納要領**

- 一 八十八夜のご案内に併せお申し込み下さい。一般の方は神社にお問合せ下さい。
- 一 所定用紙にお名前・ご祈願名をご記入下さい。

- 一 初穂料 講中の方 二千元  
一般の方 三千元

更新につきましては祭典にあわせて、または旗の状態を見てご案内申し上げます。



**神まつる親の姿が子を作る**

(家庭の祭り「標語入選作品 愛知 木原 清さん

**正月祭典 お日待ち齋行される**



神社で行われた正月の諸祭典は、天候に恵まれつつがなく齋行されました。おだやかな元旦。歳旦祭に始まり、多くの氏子崇敬者の皆さんにご参拝いただきました。神札授与所を新設したことで、

「初詣にお守りや破魔矢を受けた」との声にいくらでもお応えできたかと思っております。一転して厳しい寒さ、強風となった斎火祭も、多くの方のご協力を頂き、無事にとり収めることができました。温かなもてなしと灯籠の明かりと人の輪で心も身体もあたたかくなった気がしました。皆様にご感謝申し上げます。



家庭により様々な祭り方

各ご家庭ではお歳徳神さまをお迎えし、良い年をむかえられたことと思います。神棚のお祭「お日待ち」に、今年も多くのご家庭を訪問しご奉仕させていただきました。家族構成や仕事など条件がある中、「できれば家族そろって」と言っていただけるようになりました。神様やご先祖様をおまつりすることで、お年寄りから若い世代、そして子供たちへその家のしきたりや歴史が伝わっていき、感謝のこころ、謙虚なこころがそだっていくのだと思います。ぜひそういった機会にと考え、奉仕させていただきます。お待ちしております。なお、訪問の予定日時が大きくなることになりました。お詫びいたします。

お日高さんの自然

# 「ウメ」



三月の半ばも過ぎ、大分春めいて梅の花の満開も近い。

さて、ウメはバラ科・アンズ属に分類され、アンズとの交配種も作出されている。長く伸びる徒長枝には花芽をつけることは少ないが、春に伸びた長さ三〇cm以下の枝の葉腋には七〜八月にはなめを多くつけ、翌年の早春に葉が出る前に開花する。そのために春早く剪定作業が行われる。「ウメ切らぬバカ」と言われるように剪定を繰り返し、小枝を増やすのが栽培の「こつ」である。  
日本には野生種はなく、原産地は中国西南部から揚子江沿いに至る地域とされているが、台湾の山地にも自生しているという説もある。  
日本への渡来は文献上「万葉集」に初めて登場することから七世紀後半と推測される。  
中国での生薬名は烏梅（ウメイ）で、明治時代

まで「ウメ」又は「ムメ」と訛って呼ばれていたという。

ウメの花は万葉の昔から人々に愛され、実も食用や生薬に利用され目的に応じて多くの品種が作られてきた。

観梅園として水戸の偕楽園や青梅市の吉野梅郷などが有名であるが、当時は藩財政の一助とするため採果の目的でつくられたと言われている。ウメは、有機酸のクエン酸やミネラルを多く含むため現在は健康食品として再評価されている。最近、梅酒や飲料などの需要も増えている。特に、昔から利用されてきた梅干しは日本独特の食品として重要で、海外からも注目されている。

ウメの主要産地は、和歌山・群馬・長野・山梨・福島・茨城の各県である。

最後に、「梅花の里 角田」の一市民としてもっと「ウメ」に関心を持つべきであると思っ

る。  
(文/小島和夫氏)

## 「ご奉納・ご奉仕」

- 一区 目黒 暢子さん 新嘗祭奉献梨
- 二区 酒井 貞八さん 正月奉献野菜
- 三区 齋藤 公一さん 正月奉献野菜
- 四区 佐藤 善一さん 正月奉献野菜 米
- 各区 神社総代各位 各祭典神饌用野菜等
- 四区 佐藤 敏さん 祈年祭奉献野菜
- 横倉 塚目 克子さん 月次祭神饌用野菜

- 柴田町 本多 三學さん 奉献清酒
- 丸森町 齋藤 康郎さん 月次祭奉献菓子
- 一区 齋藤まつ子さん 神饌用白丁縫製

## 社頭暦

- 四月 一日 月次祭
- 六日 春季例大祭・神輿渡御
- 二九日 みどりの日(昭和天皇誕生日)
- 五月 一日 月次祭
- 子眉嶺神社例祭 八十八夜
- 三日 憲法記念日
- 五日 端午の節句 こどもの日 立夏
- 六月 一日 月次祭
- 三〇日 水無月大祓

## 編集後記

担ぐから神輿。ところが担ぐ神輿は、今は伊具・角田内でも香取神社と当社ぐらい。これも若い方々のご努力の賜物で、子供たちに本物を示したいという純粋な心の発露から。ウィークデーの今年は、神輿世話人・総代こそってお願いに上っております。ご協力をお願いいたします。

神社は皆様からのご奉納・ご奉仕で運営されております。「ご奉納・ご奉仕」欄を設けておりますが、ご祈願や家庭の臨時祭等の神饌だつて、奉納に値しますので、掲載には迷ってしまいます。掲載しきれなかった分はお許し願います。(禰)